

要旨

I 目的

本研究は、助産師による幼児とその親に対する生と性の健康教育における、教育目標、教育の意義、教育内容とその具体的方法、教育実施に必要な人的および物的な準備について明確化することを目的とした。

II 方法

研究対象者は、幼児とその親への生と性の健康教育の実施経験を持つ助産師であった。各研究協力者が実施している幼児とその親への生と性の健康教育について半構成的インタビュー法によりデータを収集し、質的記述的に分析を行った。研究実施に際しては聖路加看護大学倫理審査委員会の承認を得て行った。

III 結果

幼児への生と性の健康教育の必要性についての見解として、性教育は幼児期には必要なく小学校入学以降の開始で良いとする意見と、生の教育と性の教育の両者が必要であるとする意見が聞かれた。

実際の健康教育での対象者の設定、広報、料金、開催場所、スタッフの人数、評価方法は各助産師で異なっていた。共通して行われていた主な教育内容は、いのちの始まり、胎児の成長について、胎児人形・新生児人形の抱っこ、出産について、心音聴取、産道くぐり、からだ・プライベートゾーンについてだった。親には子どもへのクラスを一緒に見てもらった後に話をすることが多く、助産師の専門性、家庭での生と性の健康教育のあり方、子どもへ伝える方法についての話がなされていた。

生と性の健康教育クラスの目標は子どもと親に分けられ、子どもにおいては【人のいのちを大切にできる】、【自分を大切にできる】、【対象者の希望に応じて異なる目標】の3つのコアカテゴリーが抽出された。親においては【人のいのちを大切にできる】、【子どもとの関係性を見つめ直すことができる】、【親自身の生と性に対する考えを再考できる】、【いのち・性について子どもに伝えることができる】の4つのコアカテゴリーが抽出された。

健康教育実施のために助産師が行っていた準備として、《助産師としての倫理観》、《知識》、《姿勢》、《クラスの構成力》の4つのカテゴリーが抽出された。

クラス実施における工夫として、《十分な事前の打ち合わせ》、《安全性の確保》、《子どもを緊張させない配慮》、《子どもの集中力を保たせる方法》、《子どもの集中力が切れてしまった時の対応》、《理解を助けるための配慮》、《参加者の質問に答えられなかった時の対応》の7つのカテゴリーが抽出された。

IV 結論

助産師による幼児とその親への生と性の健康教育における教育目標、教育の意義、教育内容とその具体的方法、健康教育実施のために行っていた準備、クラス実施における工夫が明らかになった。

性についての内容を含む幼児への健康教育の必要性に対する見解の多様性が認められ、今後も健康教育実施者および幼児教育者・学校教育者、子どもの親たちによりその必要性について検討されることが課題として示唆された。また、健康教育が必要であるならばその実施内容とその方法についての検討、教材の開発と定着、実施者育成、親への働きかけ、幼児教育者・学校教育者への働きかけの必要性が示唆された。